

一寸法師と人魚姫



成人向



ほらっしっかり
見せて!

あっ!



大変っ!
こんなに
腫れちゃって
じやない!

私が助けた時に
傷つけちゃったの
かしらっ

ええっ?
(もしかして
おちんちんのこと
知らない?)

ゆさっ♡



あう・・や、やめ・・
もう・・っ
そんなに擦ったら



でるう!

あっ!?

びゅん



ごっ
ごめんなさい!
いきなりだったから

(あらっ
この匂い・・)



さつきから本当に
ごめんなさいね

こうやって優しく
擦ったら、少しは
痛みが引くかしら?
ねえ・・どーおら?

ささっ

やだ...この味...この匂い!
凄くゾクゾクしちゃうっ!



説明しよう!
人魚は精液の匂いを
嗅ぐことで、瞬時に
発情モードに突入して
しまうのだ!
要するに都合主義な
エロ設定である!



もっと...今のもっと
ちようだいっ!

ぞくぞく

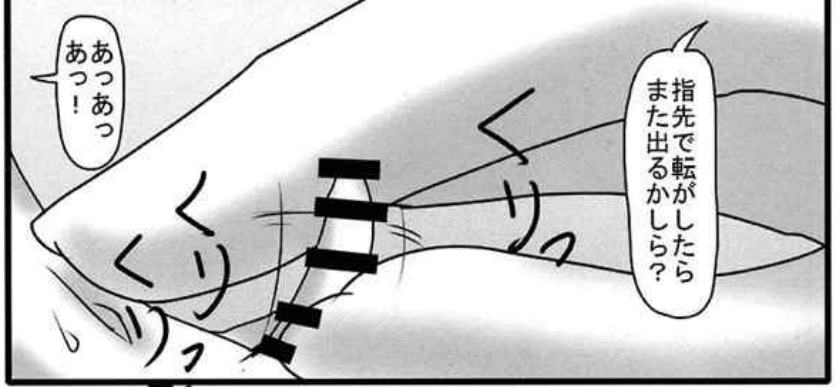


さっきの...
ゾクツてキチャウ
白のお汁...

もっといっぱい
ぴゅっぴゅしてえ...



ま、待って!
やめて!やめてえ!
今敏感なのにつ!







どーお？
柔らかいか？
持ちかいて
でしよ？

みちちち

んぐ...

みちち



みちちち

んぐ...

んがあ...
くるし...

みちち



ふふふ、さらに
こねやって左右から
こねこねして...っ
えいっ♪えいっ♪

んぐ

んぐ

(はあ...はあ...
苦しい...はあ...
くるしいのに...)

(柔らかいおっぱいで
おちんちん
捏ね回されてるみたい...)

(このままだと
もう...
っあ...)

で、マズイ!
で、でる!

みちゅ
みちゅ

みちゅ

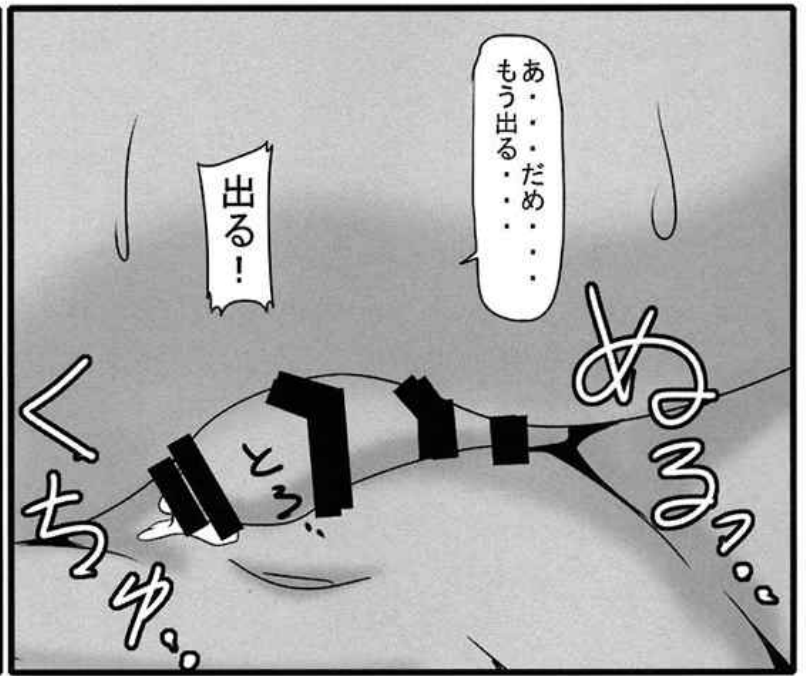
いーわよお
出して♪

さっきの白いお汁、
おっぱいに直接
出して♪

んんん...っ!
(あっ!ダメ!
そんなに押し付けられ
たらっ!)

ずんっ♡

ずん







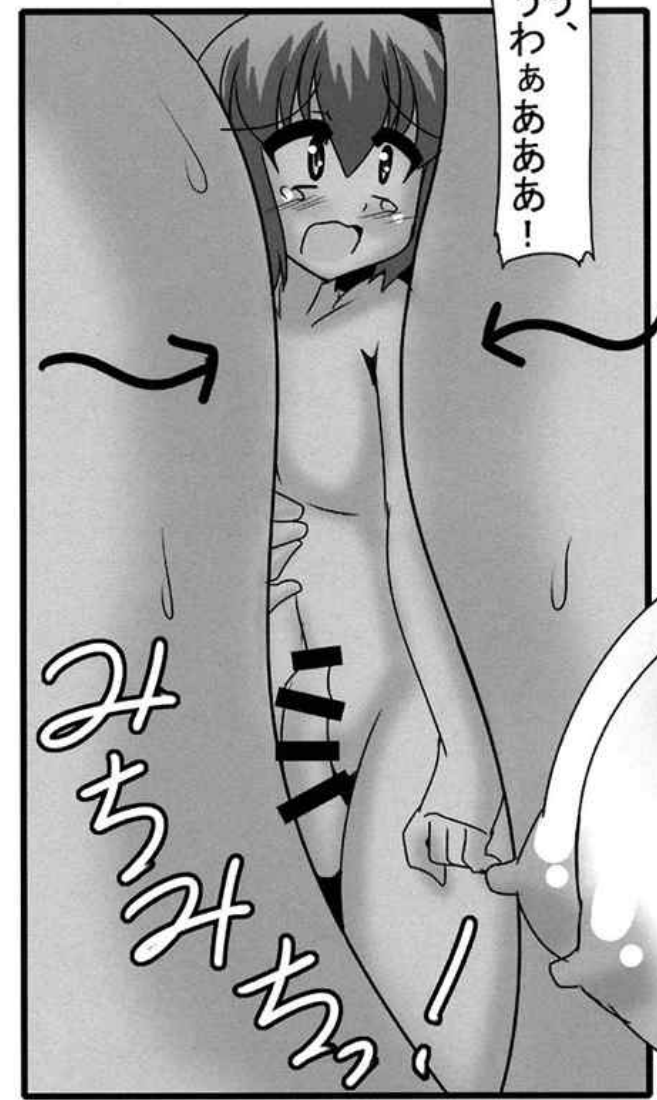
んふふう、
全身すっぽり
隠れちやいそう♪

おっぱいに食べられて
どんな感じ？

うぐぐ、たすけ、
出してえ・っ

ミミミ...

みちち



うう、
うわああああ！

みちちみちち！



もう・っ・
暴れちや、だーめ♪

全身呑み込まれ
ちやいなさい♪

ぎゅっ！





だ、だめ、早く外に出して……!

え?



いいじゃない別に裸だし♪

私も汚れちゃうし、どうせ後で洗うからいっぱい出しちやお♪

ええ!?!

そっとう問題じゃ、



じゃないと、この中に出ちゃうっ中で自分も精子まみれになっちゃうううう……!



うわああん出して!外に出してええ!

うん出して♪中で出して♪

おっぱいの中、どろどろになっちゃうよおお!

ああダメ!来たあ!

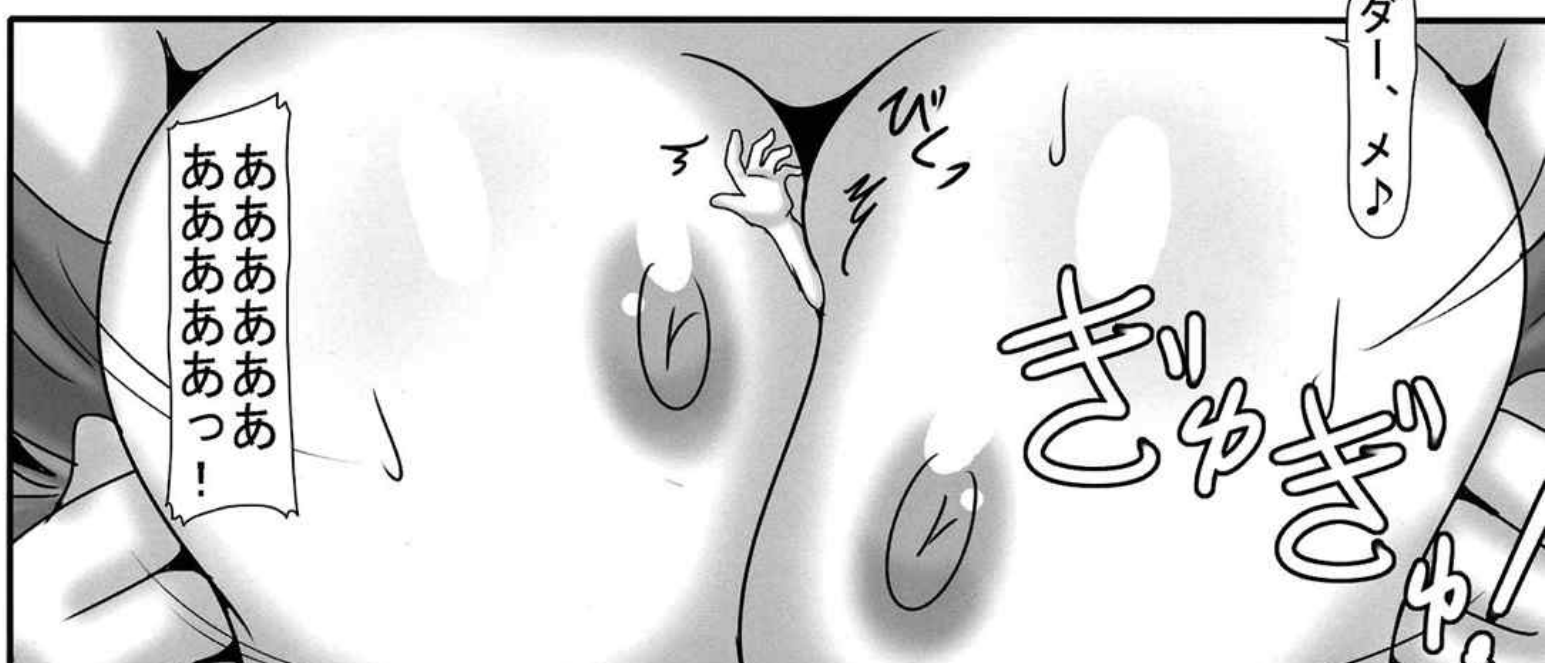
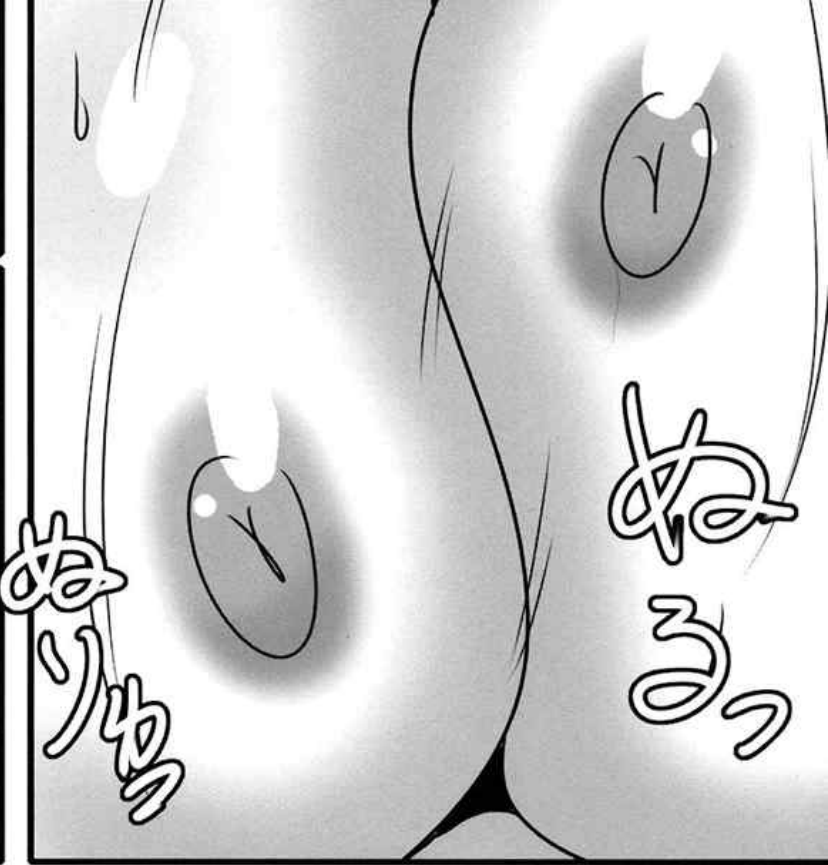
ぷん♡

しゅっ

にゅっ

おっしゅっ

おっしゅっ









はっはっ！出ちやっつ
また出ちやっつ！

ぎゅるるる



はあっ

はあっ！

はあっ



どさっ

もう何度も
出したのに、
まだ元気っ！

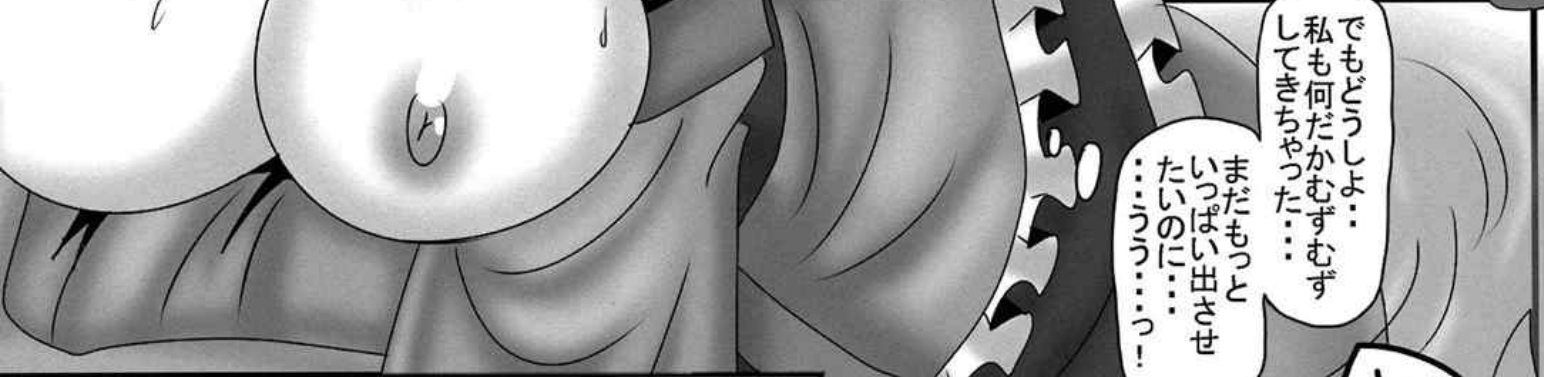
小さな身体の
どこにこんなに
入ってるのかしら？



あはっ！

あうっ！

びゅるる



でもどうしよ...
私も何だかむずむず
してきちゃった...

まだもっと
いっぱい出させ
たいのに...
...うう...っ！

きゅん♡



あんっ
やっぱり私も
もう我慢
できないっ

え？

あはっ

きゅん♡





あつーだめえ
もう、イツ...



ああんホントに
凄いこれっ
気持ちいいところに
あたってる!

ぐちゅぐちゅ
ぐちゅぐちゅ
ぐちゅぐちゅ
ぐちゅぐちゅ



イ...イク...

ひゅっ...



ぶしゃっ

いつくいつく
うつつうつつ!!

あああああ!!

びゅるん



はあ...はあ...
凄いこれ...

もとお...
もっと欲しいのお...

ひゅん

びゅん

仲の良いウェアウルフー名を影狼と言うのだが―に、ちょっと困ったことになったから来てくれと言われ、岸辺に上がってくればそこにはまだ年端もいらない少年を連れ、湖のほとりに立つ影狼さんの姿があった。

しかし、その「少年」というのは普段私が見慣れているそれとは違い、その体躯三寸ほどしかない。あれ、この姿、どこかで見たような…。

いぶかしげな表情で少年をまじまじと見つめる私を見て、影狼さんがはあ、とため息をつく。

「まあ、だいたい貴方の考えている通りなのよね、この子」

その言葉にえっ、と顔を上げれば、そこには心底困ったような彼女の表情。

「考えてるって、…まさかあの一寸法師に？」

「そ」

一寸法師、その名を針妙丸と呼ぶ彼女は、自身の持つうちでの小槌によって、対象を大きくしたり小さくしたりできる。この子もまた、彼女の小槌の犠牲者になった者なのだろうか。と、あまりのことにととうとう我慢できなくなったのだろう。少年がさめざめとその目から小粒の涙を流し、すすり泣き始める。

「うっ、ううっ…」

「あああ、ほら、泣かないで」

影狼さんが指で彼の頭を優しく撫で、慰める。身長が小さいという以外は、まだあどけなさの残る、いたいけな少年。一体どんな理由でこんな姿になってしまったのだろうか。

「何とも理不尽な話よ、全く…」

そう漏らすと、影狼さんは事の次第を話してくれた。

※

影狼さんが言うには、こういうことだった。

寺子屋の帰り、道をとこと歩くと針妙丸さんを見つけた子供たち。その中の一人に、少年の姿もあった。

子供特有の好奇心というのものもあるのだろう、少年が止めるのも聞かず彼女にちよっかいをかけ始める子供たち。当然そんな彼らの態度に癩癩を起ささない針妙丸さんではない。仕返しだとはばかりに小槌を一振り、二振り。ところが、その向きがまずかった。

蜘蛛の子を散らすように逃げていく子供達の間をすり抜け、小槌の術が直撃したのは、あろうことか止めに入った少年だったのである。

「そんなことが…、それで、針妙丸さんは？」

「残りの連中を探しに行くんだ！って、どこかに行っちゃったんだって」

運よく彼女に見つけてもらわなければ、どこかの妖怪に食べられていたかも

しれないというのに……。誤射した拳句にどこかに行ってしまった針妙丸さんに私は少しの怒りを覚えつつ、少年に心底同情していた。

「それで、どうするんですか？これから……」

私の言葉に、どうしようかなあと天を仰ぎつつ思案する影狼さん。しかし、何か思いついたのか、私に少年をはい、と渡す。

「えっ、あの」

「じゃ、そういうことで」

それだけ言い残すとくるりと背を向け、すたすたとその場を去って行くようにする影狼さん。

「ちよっ、ちよっと待って下さい！」

慌てて追いかけてやろうとするが、ひれのある体では当然陸に上がることもできない。私はただ、遠くなっていく彼女の背中を見つめることしか出来なかった。

※

「はあ、どうしましょうか……」

少年をその手に押し付けられ、私は途方に暮れたように彼に視線を落とす。不安そうな表情でこちらを見返してくる彼に、私は苦笑することしか出来ない。

「どうしようって言っても、貴方が知っているわけもないしね……」

ともかく、彼を安心させようと、ぐっと少年をその胸に抱き寄せる。と、驚いたように胸元でじたばたし始める少年。

慌てて胸元から少年を離す。どうしたの？やっぱ怖い？

「いや、その……」

言葉を濁す少年の表情は少し紅潮している。一体何事かと覗きこんで見ると、少年が腰を折りたたんだその奥の方に、僅かにこんもりとしたものが見える。

「これって……」

恐る恐るそれに触れてみれば、ひうっ！という叫び声とともにピクリと身体を震わせる少年。

「あなた……」

「ごめんなさい……」

言葉を失う私に少年が唐突に切り出す。

「実はさつきからお姉さんのおっぱいが気になって、それで……」

そう言うと、羞恥心でまたスン、と鼻を鳴らし始める少年。

あまり自覚したことはないが、霧の湖の住人の中では一番大きいと評される私の胸。しかしこうもストレートに言われると、私の方も何だかドキドキしてきてしまって、あはは……と乾いた笑い声が漏れてしまう。

「あ、ああ…：そうなの…」

返答が急にぎこちなくなつた私を、機嫌を損ねたと思つたのだろうか、また少年はごめんなさい…：と小さな声で謝ってくる。

そんな彼を私は自身の顔の前に持つてきて、努めて穏やかな表情でまじまじと観察する。目にうつすらと涙を浮かべてこちらを見つめる彼の表情が、私の母性本能を擽つてしまつて仕方がない。

「いいのよ、男の子だもの。むしろ私に興味持つてくれて、お姉さん嬉しいな」

そう言つて、空いた方の手で自身の胸を持ち上げる。スイカのように大きな少年にとっては大玉のような乳房がゆさつ、たゆんと揺れ、弾み、少年はまた視線を逸らそうとする。しかし、そんな彼を逃がさないように、今度は半ば押し付けるように、彼の体を胸元に導く。

「あつ、お姉さ、—むぎゅつ」

全身を乳房に押し付けられて、情けない声を上げてしまう少年。そんな彼が逃げ出さないように、私はしっかりと乳房に身体を固定させる。

「ふふつ、どう？やっぱり気持ちいいかしら？」

最初のうちはじたばたと暴れていた少年も、少しずつ落ち着いてきたのか、それとも骨抜きにされてしまったのか、少しずつ抵抗を止めて、自身の身体を弛緩させ始める。

やっぱり気持ちいいんだ…、私は高まる鼓動を押さえて、先程盛り上がつていた彼の下腹部がどうなつているか確かめるように、そつと触つてみる。

と、んつ！と声を上げて、また少年がびくりと痙攣する。しかして同じ手に

二度もかかる私ではない。乳房と下腹部の間にすみやかに指先を滑り込ませ、そこをくりくりとまさぐつてみる。と、

「うわあ…：すつごくおつきくなつてる…」

「うう…」

デリケートな部分を触られ、少年は恥ずかしさのあまり私に身を委ねることしかできなくなつてしまう。それに気を良くし、私は何度か彼の下腹部を愛撫してみる。

—すりつ、すりつ

「あつ、んんつ…！お姉さん…！」

切なそうに声を上げて、私の名前を呼んでくる少年。あつ、やばい、この子すごく可愛いかも…。

心の奥にポツと燃え始めた小さな劣情の火は消えることなく、私はますます指を擦る動きを速くする。緩急をつけ、指先に押し付けたりすばやく擦り上げたり。もちろん豊満な乳房に彼を押し付けるのも忘れない。

乳房の柔らかさを感じさせつつ、その快感をしっかりと下腹部へ集めさせると、少年もそこに違和感を感じたのだろうか、お願い、止めて！と懇願し始める。

「ああつ、お姉さん！何か、なんか上がつてくるっ…！」

逃げ出そうとするその動きがまた彼の快楽を煽り、少年はどうしようもなく声で抵抗するほかない。が、そんなことなどはや火の付いてしまった私には関係のないこと。彼の懇願を無視し、休むことなく指で下腹部を愛撫し続ける。

(いいのよ、我慢しなくても……お姉さんの指先に、上がって来たもの、全部出しちゃって……！)

と、その時だった。あまりに愛撫に気を取られ過ぎたのだろう、私の手の中から、少年の体がするりと飛び出す。

しめた！という少年の表情、しかし私は、逃がしたくない一心で慌てて彼の体を背中から押ししてしまう。

—ばふっ！

クッションのような私の乳房に、少年の体が深く沈み込む。そして手の平の力に任せたまま、ぎゅううつと手と乳房のサンドイッチにされ、そして……

「ああっ、あつ、あああああああああつ！！！！！！」

下腹部全体に乳房の弾力を感じ、服越しでも分かるほどにどくん、どくつ、どくつ……と射精してしまう少年。私はそんな彼の体を離すことなく、彼が射精しきるまでぎゅううつと押さえ続けていた。

※

痙攣する少年をしつかりと抱きしめ、それが止まるとゆっくりと身体を離す。肩を震わせ息をする彼の背中を労るように撫でてやるが、私の劣情は何故か消えることがない。私は彼に気付かれないように、こつそりと自らの服に手をかけていく。

そうして、ようやく少年が気持ちいを落ち着かせ、ふと上を見上げた時には、

まさに彼が言葉を失ってしまうほどの光景が広がっていた。

「ふふふ……」

紅潮した顔で彼を見下ろす私。上半身の着物を脱ぎ、自身の乳房を惜しげもなく露出して、少年を誘惑する。

彼の身長と同じか、むしろ彼の方が小さく見えてしまうほどに豊かな乳房に、少年が見惚れてしまわないはずがない。その隙について、私は再び少年の体を自身の乳房へと近づけ、静かに圧迫する。

「うっ……」

全身を巡る快感に、つい声を漏らしてしまう少年。その姿にしてやっつたり表情を浮かべる私。しかしここで私は、彼を押し付けた位置の悪さに、逆襲を受ける羽目になる。

少年が一瞬身体を仰け反らせ、そのまま顔を乳房に押し付ける、と、
—ちゅっ

「あんっ！」

少年がその口先を付けたのは、ちょうど私の乳房の先端。薄紅色に色づいたそれを気に入ったのだろうか。そのまま離すことなく吸いつき始める。

先端から全身に伝わるぞくぞくとした感触、それに耐えきれなくなった私は、つい押し倒すように少年を胸の下敷きにしてしまった。

ぐにゅううつと広がる乳房の下から、くぐもった声で「んぐうっ！！」という悲鳴が聞こえる。そんな彼に「……もう！！」と少し怒ったような声を出す私。

「私が気持ちよくしてあげるんだから、そんなことしちゃダメ！」

少年を乳房の下に押さえつけたまま、私は前後に身体を動かし始める。

「ほら、気持ち良いでしょ…」

あなたは私に、身体だけを委ねていればいいんだからと呟いて、さらに胸を動かす動きを激しくする。

「はうん…」

射精直後で敏感になった身体にまたもおそいかかる快感。気持ちよさに声を漏らし、少年は身を振ろうとするが、そこに本気で逃げようとする意志はない。

そこで私は、乳房を擦り上げる動きを緩やかにして、その柔らかさ、弾力を教え込むように少年を愛撫してやる。

「ふふっ、どうかしら、私のおっぱい」

「あう、きもちい、です…」

乳房の下からちよこんと顔を出し、まさしく子供のような返事をする少年に、私はまたも嬉しくなってしまう。

「じゃあ、もっと気持ち良くしてあげる」

そう言うと、今度は下乳を使い、乳房の重さだけで少年を圧迫する。豊かな乳房が彼の体を優しく包み込み、背中のひんやりとした地面の感触と相まって、少年はつい気を許してしまった。

「びゅるっ」

「あら…」

わずかに漏れだした少年の劣情の走り。私はそれを敏感に肌を感じ取って、くすくすと声を出して笑ってしまう。

「また、出したいのね」

彼に向けてなのか独り言なのか。私は一旦身体を起こすと力の入っていない彼の体を手取る。そうして一回顔の前に持つてきて、ちゅっ、とキスを一回。いじらしくも頬を染める彼を尻目に、彼女はもう片方の手で両の乳房を大きく開き、谷間を見せつけ…

「…ふふっ」

そう笑って、私は少年をそのまま、胸の谷間の中へと押しこんでいった。

※

谷間に入れられていくと同時に、両サイドから全身に向けて、ふかふかした乳圧に包まれる少年。

しかし今の彼には羞恥心と言うものはほとんど無く、谷間の中で一番乳圧の高い所に入れられても、リラックスしたかのようにその身を委ねてくれている。その様子に、いい子ね、と谷間から飛び出した頭を一撫ですると、ぷるりと身を震わせ、今度は自ら腰を打ちつけようとする少年。

「あらあら…」

呆れたように、そのまま彼のしたいようにさせてやる。彼が腰を打ちつけるたびに、熱を持った体の、さらに熱を持った部分が柔肌に触れるのを感じる。あえて胸を寄せることはせず、少年の痴態を見つめる私。こんな姿を誰かに見られたら、少年は勿論のこと、私も表を歩けないだろう。

(ま、「歩く」表もないんだろうけどね)

そんなことを考えつつ少年を放置プレイにしていると、彼も少しずつ疲れてきたのだろうか。「はあ、はあ…」という激しい息遣いとは裏腹に、腰を打ちつける力が弱まってくる。そうして、完全にその動きが止まった時に、ふっと私の顔を見上げてくる少年。

「お姉さん…」

かすれたような声、紅潮した顔に潤んだ瞳、そしてものほしそうな顔。

「お姉さんの、大きくて柔らかいおっぱいで、イかせてください…」

その切なげな表情に、今まで抑えに抑えていた私の理性も完全に吹き飛んでしまっていた。

「ああんっ！もう、かわいい！！」

半ば嬌声のような声でそう叫ぶと、少年の体を谷間の中に一気に押し込む。彼の体が、頭から足先まで全部私の乳房の中に包み込まれてしまう。

そうして、今までにない強い力で、それこそ少年の体を押し潰さんばかりの

乳圧を与え、彼の快感を高ぶらせようとする。それは、彼に快感を与えたいという気持ちでもあり、もう彼を離したくないという、半ば母性にも似たような感情だった。

「あうっ、おねえさっ…！ちよつと、はげし…っ！！」

谷間の中で少年が言う声も、私には聞こえない。今私の頭の中にあるのは、さきほどの彼の快楽に蕩けた表情。それがもつとどろどろになるのを見たくて、私は何度も何度も、彼を乳房で擦り上げ、押し潰し、弾力と柔らかさと乳圧を、彼にひたすら叩きつけた。

「どびゅっ！！！」

私の遠慮のない攻めに、今まで我慢していた少年が耐えられるはずもない。身体の底から突き上げてくる劣情は、そのまま留まることなく私の乳房を白く染め上げていく。

「どびゅうっ！どくっ！どく、どく…どくっ…！」

壊れたポンプのように激しく精液を吐き出す局部。そして谷間の中で狂ったように何度も痙攣する彼を、私はしっかりと胸に抱きしめる。

「あうっ、がっ、かはっ…、お、お姉さん…っ！」

「大丈夫、大丈夫…」

少年を安心させるように、小さな声で呟く私。そうしてようやく彼の痙攣が止まり、ゆっくりと谷間を開いた時には、汗ばんだ素肌にぐったりと貼りつく

少年の姿があつた。

※

そつと掌に持ち上げると、ヒクン、と少年が身体を跳ねあげさせる。それをあまり刺激しないように草地に身体を横たえようと、私は一旦水の中に飛び込み、汗と精液に濡れた身体を洗い流す。

そして再び地上に上がると、そこには疲れ切つたのか、すう、すう、と深い寝息を立てて眠る少年の姿が見える。そんな彼を起こさないように、私は岸に腰かけ、彼の体をそつと撫でてやる。

「ん…」

ひたすらに快楽に溺れ、しこたま劣情を出したとは思えないほどに穏やかな表情。しかし、ふと少年の口からこぼれた「お姉さん…」という言葉に、私はまたもやドキリとしてしまう。

「これは…どうしようかしら…」

あれだけ気持ち良くさせられて、この子はもう私がいないと生きて行けなくなつたりして、もしそうなつたらどうしよう、

やはり住処に連れて帰るべきなのだろうか。そうしてそこからどんなことをしてあげれば、いや、どんなことをしてあげられるのだろうか？

ひとたび思い始めた妄想じみた想像はなかなか留まる事を知らない。思案にふける私と深い眠りにについている彼の間を、穏やかな風が吹き抜けていた。

—終

■後書き

初めまして、またはこんにちは。赤袖です。
今回は以前描いた幽香 × ショタ針妙丸本の続きのな何かになります。
ただ、前回を読んでいなくても分かる内容にしたつもりです。

毎度ながら、私が針妙丸描くとタダのモブショタにしか見えないのが
ツライ・・・しかもショタ化・・・。
そろそろ針妙丸ファンに本気で怒られないかとヒヤヒヤしながら
描いています。
でもショタの方が好きだから、やめないけどね！！！！

私事ですが、最近仕事の方でバタバタ
し始めており、同人出すのも描くのも
ペースが落ちてきております。
正直今回で一旦同人活動は「休止」
しようかと迷ってたのですが、
どうなるかはわかりません。
どうなろうと絵は描き続けたいですね。
あと黒下着幽香さんとか幽リグとか
童貞食い幽香さんとかまだまだいっぱい
見たいし (ry

最後になりますが、今回も前回の
幽香 × 針妙丸本同様、てみぬさんに
ゲスト小説をお願いしました。
今回もお忙しい中、ありがとう
ございました！
シュリンカーはこれくらいの
サイズが一番好きですね！！

一寸法師と人魚姫

発行：妄想族の巣窟

発行者：赤袖（あかそで）

発行日：2014. 12. 29

印刷：有限会社ねこのしっぽ様

Blog:<http://tyaramu.blog.fc2.com/>

PixivID=16443

原作：上海アリス幻楽団様

禁止事項：

- ・ 18歳未満者による購入、所持、観覧
- ・ 無断転載、複製、アップロード

サークル:

妄想族の巣窟

※ 18歳未満者の購入を禁止します。

